## 会話

舗道に照り映える光、流れる雑踏
書店にずらりと並ぶ様々な世界
見上げるビルの高さと、眩しいガラスの反射
この軽さと雑多な感情は―――俺のもの

精一杯生きてるさ、皆んな弱いけど
俺も弱いさ、だから恋もする
洒落た喫茶店でキリマンジャロもすする
けれど、俺だって力いっぱい生きてるよ

俺はお前を虚実の街と呼ぶだろう
けれど大好きだよ、分かるだろ？
俺が欲しいのはゆるぎない自信じゃなくて
感動と悩みと、そうして何よりも様々なふれ合いだから

つまり俺はお前と同じ穴の狢なのさ
だから俺がこうして来る時には
いつでも今日のように笑って見下してくれ
そうしたら話してあげるよ、お前の知らない世界のことを

(1984.8.3)